シンフォニカ　ひむか

（第３楽章と第４楽章は切れ目なく）

第１楽章

よく晴れているが冷たい風の吹く朝、私は大学の音楽科校舎の二階のピアノ練習室で少し離れ

た練習室から聞こえてくるバイオリンの音を聞きながらその日の午後のM高校での面接のことを重苦しい気持ちで考えていた。窓の外で子供たちが凍った水溜りの上をスケートの真似ごとをして遊んでいる。

　自分は教師になりたいと思ったことはない。少なくともそのために音楽を勉強してきたのではない。しかし作曲家として身を立てるという中学時代からの願望は、自分の才能に自信が持てなくなってきた今は諦めるか、少なくとも当面選択を迫られている卒業後の職業として実現させることは不可能であろう。やはり今は確実な教職の道を選ぶしかないだろう。学校で教えながら作曲の勉強を続けることもできよう。作曲法の教授はまず第一に第一級の演奏家をめざせと言っていたが、自分はとうてい一人前のクラシックピアニストにはなれまい。度胸がない。中学一年生の時、県のコンクールで自分はステージ度胸がないことを思い知らされた。

　そのコンクールで私はショパンのポロネーズの一つを弾いていた。快調に弾き始め難しい部分も練習の時よりも綺麗に弾けた。そしてふと客席の母に心の中で「どう、上出来だろう」とつぶやいた。そして母のいつもの上機嫌の声が快く聞こえてきた。その時私はつい一瞬客席の母がいるあたりに目を配った。ところが母の姿をとらえ損なったかわりにたくさんの見知らぬ人たちがじっと自分を見ている視線をまともに受けてしまった。　家で練習している時そばに立って聞いている母によく視線を投げ母の表情から演奏の出来ばえを判断する、それは私が物心ついた頃からピアノの手ほどきを受けた母との間にそれまで何度も交わされた無言の会話であり、うまく弾けたと思う時の癖となっていた。ところがこの時私の目は聴衆の中に母のいつものほほえみをとらえ損なってしまった。そしてそれまでは母ひとりを意識して弾いていたのだが、急に何百という聴衆が私の意識の中になだれ込み私を見つめ私のたてるピアノの音にきき耳を立て始めたのだ。私は一瞬軽いめまいにおそわれた。自分が今ライトを浴びてステージの上でピアノを弾いているのは現実に今起こっていることではなく、もう済んだことを回想しているのだという心地がし、そして次のフレーズではしくじってしまうということまで覚えているような気がした。たちまち音を間違える。練習では間違えることのまずないなんでもないところだ。心臓が激しく鼓動し始める。そしてその時初めて私は遺精を経験した。それは私のリズム感覚を一瞬のうちにマヒさせ、射精の律動だけが私を支配した。曲は崩壊した。「お母さんが悪いんだ！」そう思うと私は曲を中断した。客席からため息が聞こえてくる。それは私には非難の声として聞こえた。私

は立ち上がって小走りにステージから去った。それ以来永く私はステージでは弾こうとしなかった。やっと高校生になって学園祭などの気楽な場で二度弾いただけだ。そしてそれはジャズバンドのピアニストとしてだった。

　悪夢のような回想が中断された。バイオリンが鳴り止んだのだ。やがて床板をきしませる足音がこちらのコンパートメントに近づき、軽いノックの音とともにドアが開いた。

「江島、そろそろ行こうか」バイオリンを脇に抱えた男が上半身だけ部屋に入れて言った。

「うん」私はアップライトピアノの上に置いておいた腕時計を見、それをはめた。「高橋、お前の曲はもうだいたいいいみたいだね。さっきから聞いてたけど、いつのまにか仕上がってきてるじゃないか。上出来だ。ピアノ伴奏のほうもうまく出来てればもう完成だな。無伴奏であれだけしっかりしているから伴奏を仕上げるのも簡単だろう。ずいぶんいいのが出来そうだなあ」

「いや、実はもう先生の手がかなり入ってるんだ。だいぶ削られて短くされちゃったよ。そっちのバリエーションはうまく進んでるか？」

「いや、このところずっと堂々巡りにあけくれているよ。スランプだ。重症だ」

「スランプ？めずらしいな、おまえがスランプと言うとは」

「めずしくないよ、しょっちゅうだよ。だからおれの曲はみな未完成のままだ」

「おれはスランプになったと思ったら一日二日バイオリンを弾かないことにしている。こいつを部屋に残してひとりで旅行にでも出かけるんだ。おまえも曲のことは忘れてどこか行ってこいよ。気分転換するんだ。それも作曲のうちだ」

「バリエーションか？」私は笑った。

「そうだ、バリエーションだ。名曲は旅のあとに生まれるもんだ。授業のほうはおれが代返しといてやるからさ」高橋も笑っている。

「旅行したくても金欠病だ」

「きょうバイト代が入るじゃないか。一二泊ぐらいの外泊はできるだろう」

「そんなぐらいじゃあこのスランプは脱出できそうにないからな」

「まあとにかくスランプには旅が一番だ。さあ、そろそろ行かなくては、バスがあと７分だ」

私と高橋はM大教育学部特設音楽科の同じ研究室で作曲を勉強しているピアニストとバイオリニストで、日曜日の朝十時から十二時まで宮崎市内の楽器店でその店の主催するジュニアオーケストラの指導をアルバイトで引き受けていた。私が指揮をし高橋がコンサートマスターで、あと三人管楽器奏者が同じ音楽科から参加していた。私たちは三週間後に控えたクリスマスコンサートまでこのオーケストラを指導することになっている。

「江島、そのバッグ何だい？」高橋は床に置いてある白いバッグを指差した。

「学生服だよ。実はきょうの午後沢田さんに会ってM高に面接を受けに行くんだ」私は後片付けをしてピアノの蓋をしめる。「やっぱり音楽教師になってしまいそうだ」

「M高？いいじゃないか、女子高だし、音楽には力を入れてるみたいだし、あそこの合唱部は九州でもトップクラスだ。あそこに推薦してもらえたなんてたいしたもんだ」

「しかし沢田さんも言ってたけど、あそこは進学校だから大学受験優先のカリキュラムを組んでいて生徒たちもその気で音楽の授業なんて息抜き的存在なんだ」

「それならなおさら気楽でいいじゃないか」

「沢田さんはうんざりしているらしいよ。あと一年で辞めるんだって」

私は面接用の学生服の入ったバッグを持ち、高橋はバイオリンケースを持って校舎を出る。雀の一群が校舎前のベンチの周りから一斉に飛び立った。すると氷のかけらが滑ってきて私の足元で止まった。さっきまで水溜まりに張った氷の上を滑っていた子供たちは、氷を割ってそのかけらを蹴ってサッカーのような遊びを始めていた。私はそのかけらを彼らの方に正確に蹴返した。よく晴れた空に飛行機雲が一本にじんで消えかけている。風が冷たい。

「沢田さんはあれはペシミストだからいけない。彼の言うことをいちいちまにうけていたらこの世は闇だよ。あの先生は歌を歌わせると超一流だが、しゃべらせるとどうも人の気分を悪くさせる。まあおまえもおれもあの先輩にはアルバイトや楽器のことでいろいろお世話になってるけど、どうも尊敬できないんだよな」高橋はそう言いながらどんどん歩く速度を速める。

「うん、まあとにかくきょうの面接は気が重いよ」

大学前の停留所でバスに乗った。三つ目のバス停で三人の同僚が各々の管楽器の入ったケースを持って乗ってきた。

「よう」五人はお互いに声を交わす。

「先生、きょうあたりあのおりんちゃん、お茶でも誘えよ。あの子お前に気があるよ、みえみえだぜ」トランペッターの神原が高橋の隣にどんと座って言った。「もうあんまりチャンスは残されてないぞ」

「言うなよ、それは。気がふさぐから。オレはおまえみたいなプレイボーイじゃないんだから」高橋はバイオリンのケースで神原の腹を突く真似をした。

彼は高校二年生の少女でジュニアオーケストラのあるバイオリニストが確かに好きだった。そして毎週日曜日の朝の練習を一度も欠かさなかったのは、そのためであることも事実だ。そしてその少女も練習には必ず来て高橋を「先生」と呼び、いつもバイオリン奏法に関する質問を一つ二つ用意していた。ところが高橋は先生と呼ばれることに戸惑い、無理して先生らしく振る舞おうとするのでぎこちなくなり、その様子はふだんの彼を知っている同僚たちを喜ばせた。彼らはその子を内輪で「おりんちゃん」という愛称で呼んでいた。そして高橋は「先生」だった。

「先生、だけどこんどの演奏会で一応おれたちはお役目ご面で引退だよ。それまでになんとかしろよ。おまえ卒業したら東京だろ、もう会えなくなるぞ。おりんちゃん連れて行ってやれよ」トランペッターはあたりをかまわず高らかに言う。

「ばかなこと言うなよ、神原」

「先生、映画だ。ほら、ロミオとジュリエット、いいらしいぜ。練習が終わったら二人で行ってこいよ」フレンチホルンのケースをジーンズの両足の間に置いてすわった吉田が、窓の外の映

画館の大きな看板を指差してそそのかす。するとバスは右にカーブを切り、目抜き通りに入った。

「そういえば、あのおりんちゃん最近眼鏡してないけど、コンタクトレンズなのかなあ。やっぱり先生を意識してるからじゃないのか？」はしっこに座ったひげ面のフルーティストの佐田が笑って言う。

高橋はもう彼らを言うがままにさせている。彼にとってこの話題になんらかの意志を表明することは、彼が永く持ち続けているある願望に関する意志の表明をも意味していた。彼には他に長い間思いを寄せている女性がいる。同僚たちはまたそれも知っている。そちらの話題はしかしタブーである。だから彼らは知らないふりをせざるをえない。

高橋はバイオリンと作曲を勉強するために音楽科に入ったが、三年生の時、同期のピアニスト岡田真理と組んでバイオリンとピアノのためのソナタや小品を数曲仕上げたことがあり、その時から彼女を好きになった。その気持ちを打ち明けたが、彼女は音楽科でも一二を争う練習の鬼で、毎日最低五時間はピアノに向かってないと気がすまないという熱心さで、ずっと異性関係を意識的に避けているようであった。二人の関係はそれでずっとあいまいなまま一年間も続いている。高橋自身も練習は非常に熱心であったが、岡田真理を恋するようになってから集中力が散漫になることが多く、長い間スランプに陥ったこともある。そんな彼の真剣さが、初めは他人の恋には冷淡だった同僚たちをも気遣わせた。したがって、「おりんちゃん」の登場は彼らにとって高橋の救済にはうってつけだった。

ただ私だけは別の立場にいた。高橋はある時、特に親しくしていた私には自分の岡田真理への思いを吐露したのだった。そのことがこんどは私を悩ませることになった。高橋の告白があまりにも唐突だったので、これに対する私の対応は重要な告白を欠くことになってしまった。そしてそれは時間がたつとともに言いにくくなり後ろめたさも増した。私には岡田真理に関してだれにも打ち明けていない秘密があった。それは彼女が私にとって初めて自分の気持ちを打ち明けた女性であったということだ。

「岡田さんが言ってたけど、江島、おまえM高の面接受けるんだってな。いよいよ教師になる腹を決めたか」吉田が私の肩をたたいた。「おれも故郷の山口の教職試験を受けるつもりだよ」

「実は面接きょうなんだ。それで良ければ来春から採用になるんだ。沢田先輩があと一年でやめるそうで、それまでは見習い教師ということなんだけど」

「沢田さんはM高やめてどうするんだい？」佐田が体をのり出してきた。

「そりゃーオペラに決まってるだろう。あの先生は学校は二の次でしょっちゅう東京に行ってオペラをやってるんだから。給料のほとんどが飛行機代で飛んでゆくらしいよ。それでM校の方でもやめてもらおうということになったんじゃないの？」神原が知ったかぶりをする。

「いや、もう一度ドイツに留学するんだって」と言った私はしかしすでに他のことを考えていた。沢田先輩には悪いが、面接は受けても何か理由を考えだして就職は辞退しようと。「それでこの一年間はドイツ語の勉強に励むということだ」

「へえー、しかしあの人資金はあるのかい？」神原が聞いた。

「独身だからすぐたまるんだろう」高橋がぶっきらぼうに言う。「酒もたばこも麻雀もやらないし・・・」

高橋は沢田を目のかたきにしているようなところがある。沢田は学校の仕事が終わるとよく母校のM大を訪れた。そして最近は岡田真理にピアノ伴奏を頼んで歌曲の練習をしていた。いくつかのコンクールで入賞経験があり幅広いピアニストをめざす岡田真理にとってそれは歓迎すべき経験であった。しかし高橋には気にくわないことであり、特に練習が終わるといつも沢田が岡田を車で送っていくことには耐えがたい苦痛を感じていた。

「教授や沢田さんの推薦だから江島の就職はもう決まったようなもんだ。なあ今夜みんなで前祝いに飲みに行こうぜ。バイト代も入るしよ。何ならおりんちゃんもさそおうよ。な、高橋」吉田が提案する。

「いや、ちょっと待ってくれ」私は気まずそうに言う。「おれはまだ気が進まないんだ。ひょっとしたらおれの方で断るかもしれない」

「そりゃもったいないな、M高だろ？」吉田がけげんそうに言う。　「江島、おまえ他にどこかいい就職口でもあるんかい？」佐田が立ち上がりながら言う。バスがＴ通りの停留所に止まった。五人は降車口に向かう。

「いいというのはないけど・・・」私はステップをおりながら、佐田の質問に対する答えを吟味する。

私はできることなら高橋の行く東京に出てみたかった。東京には中学生の時知り合ったジャズのクラリネット奏者がおり、自分のジャズピアニストとしての才能をかってくれている。高橋が東京のＧ大の大学院で研修生として勉強すると決まったときから、今までは本気では考えなかった上京を具体的に考えるようになった。都会への憧れもあった。とにかく東京でピアノを弾いてみたかった。

「おれできればこの宮崎から出たいんだ。高校の時から七年も住んでるとここでは何をやってもつまらない気がするよ。・・・おれも東京に一度出てみたいんだ」

私は中学生の時、両親に反抗して家出したことがある。保護され、担任の先生に連れ戻されたが、その時から長い間ピアノを弾かなかった。部屋に閉じこもり自閉的生活をした。両親や六才年上の兄と口をきくことがなかったばかりか食事も共にしなかった。私がなぜ家出し自閉的になったかその原因を知っていたのは若い担任の先生だけだった。

江島家に六年ぶりに生まれた二人目の子として私は両親や兄にこわれ物のように大切に扱われ、特に母親からは人形のように可愛がられた。そしてピアノの上手だった彼女は私にその手ほどきを始めた。私はやがて母親の期待に応えることを喜びとして生きるようになり、特に彼女の好きなショパンを上手に弾いて彼女を喜ばせることが最上の幸福となった。めきめき腕を上げた私は小学三年生の時からある先生について勉強した。しかし中二の時クラス委員長だった私は担任の先生とある級友の母親の葬式に参列するため車で町に出かけていったが、その時、自分の愛する母が、普段は丁重に応対する自分の尊敬するピアノの先生とまるで夫婦のように肩を寄せて歩いているのを目撃してしまった。その瞬間から母のかけた私に対する魔力は消え、私は人形から

自分になった。自由になった。そしてピアノの練習を一切やめてしまった。母にそれをとがめられると家出し、二日目に連れ戻された。家に戻った私はピアノのある応接間に絶対入ろうとしなかったばかりか、自分の部屋に閉じこもっていることが多くなった。だがピアノから離れた私にはまるで生気がなかった。担任の先生は自分の家に連れていってピアノを弾かせようとしたが私はかたくなに拒んだ。ピアノを弾くということは自分をピアノを弾く人形のように育てておきながら自分を裏切った母親の魔術に再び屈服してしまうことだった。

しかし二度目に担任の先生の家に行ったとき、先生の学生時代の友達だというプロのジャズクラリネッターが来ていて、先生と彼とはピアノとクラリネットで得意のジャズナンバーを二つ三つ弾いて私に聞かせた。私はこの演奏がとても気に入った。楽譜からすぐに目を離し、即興的音楽を積極的に楽しもうとする二人の演奏態度は新鮮だった。そしてこのような音楽を演奏することは母に対する反抗の態度と矛盾しないように思えた。また先生の温かい気持ちをこれ以上無視したくなかった。こうして私は休日や夏休みに先生の家に行ってジャズの手ほどきを受けた。レコードもたくさん聞いた。もともとピアノ奏法の基礎はしっかりしていたので、先生を驚かすくらいの早さでジャズをこなせるようになった。

やがて私は家でもジャズを弾くようになった。家族の者たちには驚きであったが、それでも家ではずっと部屋に閉じこもっていた私が応接間でピアノを弾き始めたということは喜ばしいことだった。約一年後にクラリネッターと再会したが、彼も私の上達ぶりにあきれ、プロになる気があるならいつでも東京の自分を訪ねてくるようにと名刺をくれた。

私は高校に入るとすでに存在していたジャズ同好会に入ったが、先輩の女性ピアニストよりはるかに上手だったので次第に居づらくなり、一年足らずでやめてしまった。二年三年の時学園祭のたびに特別に頼まれてピアノを弾いたが、私のジャズに対する興味はすでに薄れており、再びクラシック音楽を弾くようになっていた。高一の時ロマン・ロランのベートーヴェンの伝記を読み感動し、続いてこの音楽家に関する本を数冊読みたちまちこの大作曲家を神様のように崇拝するようになった。そしてベートーヴェンの曲ばかり練習し始めた。特にピアノソナタは一生かけても全曲弾けるようになろうと決心した。中学生の時一番を仕上げたし他に小曲をいくつか弾きこなしたが、その頃のそれらの曲に対する姿勢とは今度はまったく違っていた。以前の私は母親の評価をいつも意識して曲を仕上げていったが、いまではベートーヴェンを尊敬する気持ちから一音一音に祈りに似た気持ちを込め、どんな軽い曲も真剣な気持ちで練習した。

やがて母との関係は外見上では回復し、結婚した兄も私がピアノを弾くことを励まし私に大学で音楽を勉強するようすすめ父親を説得してくれた。私は自分がピアノから離れるということは魚が水から出てしまうのと同じように不自然でありまた危ういことだと自覚していたので自分には音楽の道しかないと信じた。

やがてベートーヴェンの影響はついに私に作曲家をめざさせた。学校から帰宅するとピアノにつきっきりで作曲の真似ごとをしている時が多くなった。もともと孤独がちな少年だったが、作曲をするようになってから孤独を愛するようになってきた。学校ではあまり口を聞かず、休憩時間には好きなＳＦ小説を読んでいたり、楽譜をながめていたりして、人から話し掛けられなければいつもひとりでいた。そして授業中は自分の中を泉のようにあふれ流れる音楽を楽しんでいることが多かった。

ジャズを弾いていたので即興演奏はおてのものだったが、ベートーヴェンを多く弾くようになってからもっと黙想的で長い即興演奏をするようになった。それによって私の孤独を愛する傾向はさらに深まっていった。即興音楽の中に陶酔し時間の過ぎるのを忘れて弾き続け、母に注意されて初めて夜の更けたことを知ることもあった。心を打ち明けて話し合える友のいなかった私にとって即興に自分の気持ちを込めて吐露することは心情発散の代償行為となるものであった。小学生の頃から好きだった近所の女性が交通事故で死亡したと聞いた日、私は彼女を想いながら長い弔いの曲を奏でた。和音と不協和音の呼応、それらに生命を与えるリズム、そして予知されることなく生まれ去ってゆく美しいメロディー、あるいは神秘的変調、それらが私の感応しやすい心と共鳴し、私を時を越えたはるかな音の世界に受け入れた。ベートーヴェンのソナタを練習する時が苦しい自己訓練の時間であるなら、即興の時は快い憩いの時間であった。

私はまたＳＦ小説を愛読していたせいもあって、空想小説を書くことに興味を覚え、即興演奏をしながら創作中のストーリーの展開に思い巡らした。多くの場合読んだばかりの小説のパロディーであった。同様の趣味を持つＳＦ愛読家たちと自作を見せ合い、空想を競い合った。私にとって自由な創作はいつも快い憩いであった。

このような内向的な生き方の中にも三年生の時私にとって初めての異性の友達ができた。それが岡田真理であった。同じくＭ大の音楽科を目指しているということでふたりはある日音楽の先生に連れられてＭ大音学科のある教授に面会に行った。ふたりはそれぞれ初見でバッハの曲を弾かされた。ピアノを弾く岡田真理の横顔を私は美しいと思った。自分の母がピアノを弾くのを見るのが好きだった私は、真理の姿に我知らず見とれた。ふたりとも素質があるので一生懸命勉強に励むようにと激励された。この時からふたりはライバル同志となり試験曲のバッハのインヴェンション二声８番などを猛練習し、競い合った。音楽の先生の計らいで吹奏楽部の練習のない火曜日と土曜日の放課後に音楽室のグランドピアノで練習することが許された。入学試験ではグランドピアノで演奏させられるのでそれに慣れておくためだった。最初は私が火曜日、真理が土曜日と割り当てられたが、すぐにふたりはいっしょに練習するようになり互いに演奏を批評し合った。

ふたりの技術を比べるなら、ずっとピアノの先生について勉強してきた岡田真理のほうが数段上だった。しかしある放課後、音楽室に彼女が来た時、私はショパンのノクターン第１番を弾いており、彼女は私に気づかれないようドアのところでたたずんで耳を澄ました。この時私はかつて盲愛していた母のことを悲しく思い浮べて弾いていた。真理が来たのを知ると私はすぐ弾くのをやめた。恥ずかしいという気持ちと腹立たしさが私を襲った。学園祭でジャズを弾いたり、作曲をしたりしている私を真理は軽蔑していたが、この時初めて彼女は私のピアノに魅かれ、やがて憧れるようになったと言う。

ふたりは共にM大教育学部特設音楽科に合格した。ちょうどその年はＴ大が大学紛争の影響で新入生を募集できなかった年で、M大も紛争に無縁ではなく学生ストが繰り返され、新入生たちは好むと好まざるとにかかわらず改革思潮の洗礼を受けることとなった。

大学生となった真理は必修科目の「オーケストラ」でチェロを練習した以外はピアノ一筋に打ち込んだが、私はブラスバンド同好会に加わりフレンチホルンやトランペットを吹いたり指揮をしたり、さらに三年生になると作曲の先生の研究室に入り作曲法を勉強した。しかしどれも中途半端であった。何かに熱中しそれに励むということが大学生になってからの私にはなくなっていた。ベートーヴェンのソナタのレパートリー化も大学で本格的に取り組もうと決めていたが実行されていなかった。ソナタに限らずベートーヴェンの曲は避けるようになっていた。作曲もいろんな種類の曲を手掛けたがどれも未完成のままだった。

そんな時研究室でいっしょになった高橋は私とは対照的に熱中型でありその正義感と行動力は私を強く魅きつけた。やがて高橋が真理のことを打ち明けるにつれ彼の鍛え上げられた精神力の陰に隠された生来の臆病さが私にも見えてきたが、それはかえって高橋に私をさらに近づけさせた。高橋はほとんどの音楽生と同じようにベートーヴェンをまず尊敬していたが、バイオリニストのせいもありパガニーニに強い愛着をもっていて、その難曲のほとんどを弾きこなした。また音楽生としては珍しく学生運動に深くかかわっていた。

宮崎での大学紛争は過激な暴力事件はほとんどなかったが、ある時ＫＭ派の学生が占拠し長い間封鎖していた校舎を教官たちが解除しようとし、それを察知したＭＳ系の学生を中心とした男子学生が応援にかけつけ、実質的には校舎に押し入った学生がＫＭ派学生を強引に追い出したことがあった。高橋はその時窓ガラスを割って最初に校舎に入った学生たちのひとりだった。しかし彼は二階で、たてこもっていたＫＭ派学生と遭遇し木刀で右手を打たれた。私は偶然向かい側の校舎にいて、これらの様子を窓から目撃した。高橋が右手を痛そうにかばいながら一階に降りてくると、私はすぐにその校舎に入って高橋のところに行った。彼の手の一部が青紫色に腫れ始めていた。外から入ってきたＫＭ系らしい学生が消火器を振って噴き出す白い泡を高橋や他の学生たちにめがけて飛ばしていた。私はすぐに高橋を医務室に連れて行った。

骨折はしていなかったが高橋は二ヵ月ばかりバイオリンを弾けなくなった。私は高橋の下宿に行ったり彼を自分の部屋に招いたりして、右手の使えない高橋の面倒を見た。私はそうすることに喜びめいたものを感じることができた。高橋に一度も会うことがなかった日には必ず夜に彼の部屋を訪れた。ある夜高橋がいなかったので朝までそこにいたこともあり、早朝高橋が帰って来ると「インスタントラーメンご馳走になったよ」と言って出て行った。

高橋を学生運動に駆り立てた大きな要因は彼の正義感であったろうが、その活動に拍車をかけたのは彼の求愛に対して曖昧な態度をとり続けた岡田真理であったといえる。彼は彼女のいる所ではわざと革新的な言葉をはくことがあり、彼が手をけがしたのもあるいは名誉の傷を受けることにより真理の気持ちを引こうという潜在的願望があったのではなかろうかと私はかんぐった。実際その頃の彼は少なくとも音楽科内では英雄視され、下級生の中には彼に対する尊敬心から学生運動に参加するようになった者も二三人いた。ある時高橋は真理に、首から吊した包帯の右手を示しながら「おれ、今度のコンクールはもうあきらめたよ、ごめんね」と言ったことがあった。彼はそのコンクールで真理にピアノ伴奏をしてもらえることになっていた。しかし真理の彼に対するあいまいな態度は変わらなかった。

高橋は音楽書だけでなく、たくさんの本を読み、議論に強く、学生大会でもよく発言した。また手相に通じていて、彼は自分の勉強しているのは手相術ではなく統計データに基づいた手相学だと言っていた。ある時彼は私の手相を見た。左手をとると「これが生命線だ。ああおまえ長生きするね」などと言いながら人差し指の先を筋に沿って滑らせた。私はその滑らかな動きに快感を覚えた。そしてずっとこのまま彼の手に触れられていたいと思った。すると高橋はある筋に指を止めて、「ほう、結婚したら奥さんを大切にするタイプだね」と言い、こんどは右手をとるとその左手の筋と対になる筋を探した。そして高橋は急に私の顔を見、にやりとして言った。「江島、おまえ女性を自分のものにしたと思うとすぐ突き放してしまうところがあるだろう？」その時私は「えっ？」と意外に思った。そして「そんなことはないよ」と笑いながら言った。しかし私はのちにこの時のことを思い返すたびにそれが外れてもいないことを知るようになった。

「おれも東京に一度出てみたいんだ」私が言うと前を歩く高橋が振り向いた。私はジャズをやりたくなったら東京に出て来なさいと言った中学時代に知合ったジャズクラリネッターのことを思い出していた。しかしあれからもう六年たっている。「知り合いの人がジャズバンドにいてひょっとしたらという口なんだ」

「そうか、ジャズか。なんという人だ？」吉田が火をつけたばかりのたばこを口に入れたままけむそうにしゃべる。

「三上という人だけど有名じゃないね」私はだれかがその名前だけでも知っていてくれることを期待したがだれも知らない様子だった。「中学の時担任だった先生の友達だ」

「なあ、江島、おまえその話うまくいったら、おれも紹介してくれよな」トランペッターの神原が冗談とも真剣ともとれそうな口調で言う。

「おまえくらいのペッターなら就職口はたくさんあるだろう」

「オーケストラだけじゃ食っていけねえから困るんだよな。結婚だってそう簡単にはできないんだ。ジャズなら食っていけそうじゃないか」

日曜日の目抜き通りの歩道は朝から人で賑わい、バス停付近はいろんな行く先のバスを待つ人々でいっぱいになっている。そこを抜けてデパートの前に来ると、開店を待つ人々が寒風を避けようとデパートの入り口の陰に立っている。ジェット機がよく晴れた空を爆音を残して飛んで行く。

五人は「ジングルベル」の鳴り響く楽器店に入っていった。すると思いがけなく沢田と岡田真理が楽譜売場の棚のそばに並んで立って楽譜をパラパラとめくりながら見ていた。長身で体格のいい沢田はどこにいてもすぐ目についた。

「おっ、沢田さんと岡田さん」神原が言うと、「しっ、ほっとけよ」と高橋がぶっきらぼうに言って階段を足早に昇って行く。私は真理の横顔を見、沢田の横顔を見た。真理が肩で沢田をこづいて自分の見ている楽譜に彼の注意を引いて何か言う。私は抑えることのできそうにない憤りを感じ息が苦しくなってあえいだ。かつて母とピアノの先生が街で親しそうに肩を触れ合いながら夫婦のように歩いているのを目撃した時に感じたのと同じ絶望感と激怒による胸をねじって絞られるような痛みが彼を襲った。私はふたりの方に歩み寄った。

「沢田さん、おはようございます」

「おお、江島君・・・」沢田は振り向いたが、私の声が少々荒っぽかったのでまごつく。

「先輩、本当に申し訳ないんですが、きょうぼくは面接に行けません。そしてM高は辞退させていただきたいんです。すみません」彼は沢田に一礼し、あっけにとられている真理に一瞥を与えると逃げるように立ち去った。その時の真理は今までに見たことのないほど大人っぽい化粧をしていて、その人工的に洗練された美しさの彼女と目が合った時私は一瞬めまいを覚えた。

待っていた吉田と佐田が私の肩を軽くたたく。三人は並んで階段を昇った。私は三階の練習室に入るとすぐにグランドピアノの前にすわりジャズを弾き始めた。すでに来ていた四・五人のジュニアオーケストラの子供たちがびっくりして私を見る。高橋はそのピアノの反対側に立って、濃紺のセーラー服に身を包んだ高二のバイオリニスト「おりんちゃん」に誓いを立てる時にするように手の平を彼の方に向けさせそれに触れないで手相を見ていた。彼女は高橋が何か言うたびにうんうんと笑顔でうなずいた。やがて神原がトランペットを取り出して私のジャズに加わった。すると高橋も私の右横にやって来て右手だけで高音部のあるキーだけをリズムに合わせてたたいた。

その日の正午過ぎに練習が終わると、高橋は初めて「おりんちゃん」を昼食に誘い、ふたりで出ていった。私は残ってピアノを弾いた。みんなが去ってひとりきりになるとショパンのノクターン一番を弾き始める。すると思いがけなく真理がひとりで入ってきた。私は演奏を中断しないで弾き続けた。曲が終わるまで真理は黙って私のそばに立っていた。終わっても話しかけてこないので私は立ち上がり、彼女を見ないで「先ほどは失礼しました。せっかくのデートのところを」と言う。

「江島君、どうしたの？江島君があんな恐く見えたの初めてだわ。M高のこと、沢田さんとても困ってられたわよ。あなた・・・」

「だからすいませんって言ったじゃないか」私はピアノの蓋を閉め荒々しくブレーザーを着た。「また彼に会ったら謝るよ」

「江島君…」と言って真理はハンドバッグから何か取り出そうとしたが、バッグの口を閉め直して言う、「お昼まだでしょ、食事に行かない？」

「なんだ、沢田さんといっしょじゃないの？」窓の外を見ていた私は振り向いて初めてまともに真理を見た。その時の彼女は朝会った時の大人っぽい彼女よりずっと真理らしく見えた。

「何言ってんのよ、沢田さんは江島君のことを断るためにM高に急いで行ったのよ。教頭があなたの面接のためにわざわざ日曜日に学校に出てくるというのに困った困ったって言ってられたわ。あなた本当に無責任なところがあるのね。」

「そうなんだ。だから教師になる柄じゃないんだ。だからはっきり断ったんだ」私の手が再びピアノのふたを開けた。

「だけど断り方があるでしょう。もっと早く言わなくっちゃ。ずいぶん迷ってたの？」

「まあね」私は真理の最後の言葉に思わぬやさしさを感じて視線を鍵盤の上に落とし、ふたを静かに閉め直す。「腹へった。昼付き合うよ」

私は真理に対してはだいたいいつもこのようにぶっきらぼうになる。それは高校生のとき彼女に思いを告白して以後の事で、まるでふたりは姉と弟というような印象を第三者には与えていたようだ。またその私の話し方は、家出する前の母に対する話し方とも似ていた。だからのちに私は、自分の心の中で母が占めていてすっぽり空洞となってしまった部分を埋めるために真理を押しこめようとしたのだと悟ることとなった。

私が防音ドアを開けるとまるで突風のように、下のレコード売場から大きなボリュームのジョン・レノンのクリスマスソングが飛び込んできた。

「江島君」私のあとを追って練習室を出た真理が言う、「でもあなた立派にここの指揮者や学校のバンドの指揮者が務まってるんだから教師としての素質は十分あるはずよ」

私は黙って階段を下りていった。

店の人からバイト代をもらうと私は真理に、自分のためにせっかくの沢田氏とのデートが台無しになってしまったのだからその償いとして昼食は自分がご馳走するよと、拒む真理を説き伏せた。

外に出ると冷たい風が吹きつけふたりをレストランのたくさん並ぶ近くの横丁に急がせた。真理の希望で野菜スープがおいしいというレストランに入った。客の少ない二階に上がる。私はそこに高橋も来ているのではないかという気がしたが、奥のテーブルで中年のカップルが食事をしているだけだった。ふたりは窓際の席にすわった。赤白のシクラメンが飾られている。

「江島君とふたりで食事するのって久しぶりね」真理は買ったばかりの大きな楽譜を紙袋から取り出してそれを開いてテーブルの上でパラパラとページを走らせながら言う。「ずっとなかったわねえ」

「高校の時以来だ」私は真理の楽譜がピアノ伴奏付きの歌曲のものだとすぐわかったが、そのことには気づかないふりをしようと思う。

「そうね、あの頃土曜日の昼によくいっしょに学校の近くの食堂に行ったわね。もうあの頃から四年もたっちゃったんだな」真理はすぐに楽譜を紙袋に戻しながら言う。

「シューベルト？」しばらくして私が聞いた。

「うん」真理は言って下を向いた。

「けさ、楽譜売り場で会ったとき、目まいがしたよ、きれいなんで」

「へへへ、これのせいかな？」真理はポケットからハンカチに包んだ付けまつげを出して見せた。

「そうだ！これだったのか、これをつけて二三回まばたきをされたら男はみないちころだ」

「小学校の同窓会で、これ付けて行ったら、友達だった子が私を見てもすぐに私と気づかなかったのよ、そんなに変わって見えるっていうのもショックよ」

「高校のときの君からもずいぶん大人びたから、小学生のころの友達なら君に気づかないのは自然だね」

「覚えてる？高校のときラブレターくれたことあるの」

「覚えてるよ、そりゃー。忘れようたって無理だ。振られたんだからね」

「あら、私振ったんだっけ？」

「振ったよ。あの手紙だって返したくせに」

「でもそれからよくいっしょに食事に行ったり、けっこう付き合ってあげたじゃない」

「そりゃーでも友達づきあいだよ」

「ずるいね」

「だれが？」

「あなたよ」

真理は付けまつげをしまうと、そのまま、だまった。つまらないことを言ってしまった、と私は思う。

高校三年生の時、私は確かに真理にラブレターを書いたことがあった。それはラブレターというより、真理のピアノ演奏に関する感想といったほうがいいが、最後に英語で「With Passionate Love」と書いたからラブレターに相違なかった。

私は初めて真理がピアノを弾くのを見たときから彼女に強く魅かれた。それまでに学校で何度か顔を会わせていたはずだったが、特に印象に残る女性でもなかった。かわいい子だなと思ったこともあったが、それは男性が少しでも魅力のある女性とすれ違うときに必然的に感じるあのマッチの炎のようにはかない一瞬の恋心以上のものではなかった。しかしM大の音楽科教授の研究室で初見でピアノを弾く真理はまるで別人のようだった。楽譜を見つめる真剣なまなざしときっと引き締まった口元は、あどけなさの残った彼女独特のかわいさをまぎれもない成熟した女性の美しさに完成させていた。

その後、放課後音楽室のグランドピアノでいっしょに練習するようになってますます真理に魅かれていった。そしてまた真理が自分に好感を持っているようにも信じられた。真理は放課後音楽室で私といっしょになるとき、淡い香水の匂いをいつも漂わせていた。もちろん香水など学校では禁じられていた。

夏休みが終わってしばらくしたある日、久しぶりに音楽室で会うと、彼女は「ずいぶん日焼けしたでしょう」と言ってブラウスの半袖をずっと押し上げ日焼けした部分と白いままの部分との境界線を私に見せた。ふたりきりだったという情況も手伝って、その肌は自分で「目の毒」と思ったくらい鮮烈な印象を私に与えた。その夜、眠れぬまま強いものに急き立てられるようにレポート用紙十数枚の長い手紙を書いた。それを書きながらどのようにして彼女にその手紙を渡すか思案した。次の練習日までは待てない。血潮がほとばしるような新鮮な気持ちは一刻も早く知らせないと、やがて自分でそれが恥ずかしくなってとても渡す勇気は持続しそうになかった。本文は、真理がいつか意見を求めていたクラシックとジャズに対する演奏姿勢の違いについて簡単に触れたあと、彼女のピアノ演奏に関する私の敬意を述べる他愛ないエッセイ調のものだったが、最後に唐突に「With Passionate Love」と書いたのでラブレターとなった。

そうして翌日、昼休みに真理の教室に行きジャズ同好会のリーダーと学園祭のことについて話しながら、真理に手紙を渡すチャンスをうかがった。その教室は何度か行ったことがあってその様子は心得ているはずだったが、その日は自分が思い描いていた光景とは雰囲気がもっと疎遠なものだった。真理までが私の存在に無関心であるかのようであった。みんな私の知らない何か重大なことに気を取られていて、こんな時にラブレターなどを渡すなどもってのほか、といった雰囲気だ。手紙を渡す勇気がひるんだ。しかしその日渡せなかったらその勇気が次の日に再び湧いてくるかどうか自信がない。是が非でもきょう渡してしまおう、そう私は自分に言い聞かせた。やがて真理がやってきて話に加わった。私は無口になった。彼女が美し過ぎるように見えた。この女性を自分のものにしようなんてとんでもない野心のように思われ再び勇気がひるんだ。その時だれかが教室に入ってきてジャズ同好会のリーダーを呼んだ。そして真理と私はその場ではふたりきりになった。「これ、ピアノのことだけどよかったら読んで」私は立ち上がりながら封筒を押しつけるように渡し逃げるようにその教室を去った。まるですぐに爆発するようセットした時限爆弾を彼女の手に渡してあわててそこから遠ざかったようだった。私は自分のしたことに興奮してその日は何も手につかなかった。ただ心は明るかった。天気で言うと晴天風強しという心模様だ。その夕私が弾いた二時間にも及ぶ即興演奏に題をつけるなら「熱情」が最もふさわしかったろう。

その日から次の練習日まで私には息苦しい悶々とした時間と甘い幻想に浸る時間が交互に訪れた。夜ベッドに入ってもなかなか眠れず浅い眠りの中で何度も真理の夢を見、朝まだ薄暗いう

ちに目が覚め、天井の木目をさまざまに見つめながら真理のことを占った。学校にいるときにはクラスの女生徒たちがひそひそ話をしていると自分が手紙を真理に渡したことを彼女たちはもう知っていてそのことをおかしがっているのだという気がしてならなかった。家でピアノを練習しようとしても真理のことばかり考え手につかず即興演奏に走ってしまう。

私は思った。「あのPassionateという言葉はまずかった。あれは余分だ。With Love だけで十分だったのに、ちくちょう！」私の十本の指が突然激しく白鍵と黒鍵とを打ち不協和音が鳴り響いた。しかしその次の瞬間私の指は優美な旋律を奏で始め、私は考えた。「いやあれでいい。あのPassionateが本当のおれの気持ちだ。あれでいいんだ。当たって砕けろだ。だめでもともとだ！」私の指が再び力強く鍵盤を打ち始め、やがて迫力のみなぎったくっきりしたモティーフがクライマックスを極めた。そして私はこれに思いを込めさまざまに変奏し続けた。

いよいよ練習の日がやってきた。私は当番の掃除が終わるとすぐ音楽室に行ってピアノを弾き始めた。バッハのインベンション二声八番。自分でもよくわかったが、曲が少々不安定であった。その時の私の心境を考えるなら仕方のないことだ。真理はなかなか現われなかった。いつもならだいたい彼女のほうが先に来てこの同じ曲をこのピアノで弾いているのだ。私は何度も繰り返してこの曲を弾いた。不安が募ってきた。どこかで真理がこの情けない演奏を聞いているに違いない。すぐやめて帰ってしまおうという衝動に駆られたが、それをなんとか抑えて努めて無心に弾き続けた。

ドアが開いた。そして真理が現われた。私は気がつかないふりをして鍵盤を見つめたまま弾き続ける。心臓が高鳴っている。そしてついに音を間違えた。私はフーと大きなため息をついて演奏をやめた。

真理は率直な言葉で先日の手紙のことを感謝した。そして「最後の一行は気になるけど」と言っていたずらっぽい笑顔を作った。私はやや上擦った声で一気に言う。「岡田さん、あれはおれの本当の気持ちだ。岡田さん好きだ。おれの恋人になってくれないか？」すると真理はあわてて言った。「いや、私困ります。そんなつもりじゃないわ。困ります。これ返します」そしてくるりと体をひるがえして教室を出て行った。

返された手紙を手にした私は愕然とし、無気力感に襲われた。私はこのような女性特有の異性に対する行動パターンを知らないわけではなかった。もうひと押しもふた押しもすれば事態は変えられたかもしれない。しかし私はその時真理の「そんなつもりじゃないわ」というせりふが、まるで研ぎすまされた名刀でもあったかのように心の深層にまで達するのを甘んじて許した。

窓から下を見ると、真理は振り向きながら校舎を出てゆくところだった。私は、ピアノに戻って即興演奏を始めた。真理がピアノの上に忘れていった楽譜がきょうここで起こったことが現実であるということを私に証し続けた。

それから二週間、つまり学園祭が終わるまでふたりはこの教室で会うことはなかった。私がそこでピアノを弾いていると真理は来なかったし、真理が先にそこで弾いていると私は遠慮して行かなかった。

学園祭で私はジャズバンドに加わって演奏することになり、バンドは一週間ばかり放課後体育館のステージを借りて練習することになった。ある暑い午後練習していると真理が数人の女子のクラスメイトと差し入れのアイスクリームを持ってやってきた。バンドの私以外の三年生のメンバーが皆、真理と同じクラスだった。その時彼女は「江島さん、がんばってね」と言ってピアノを練習していた私の肩を二度もんだ。私の体から力が抜け落ちてしまいそうな快い刺激が両肩から広がった。皆が休憩してアイスクリームを食べ始めると、真理はクラリネッターのそばに行き、親しそうにおしゃべりをした。私はこのふたりが恋人同士なのだなと思った。しかしその時私がほんのもう少しだけでも真理の性格に通じていたならこれも彼女のポーズでしかないということが見抜けていたであろう。三日後の学園祭での演奏の際、真理が花束を渡したのは私にであった。その花束には「私のマエストロ殿、今私があなたに捧げることのできるのはこの花束だけ、どうぞピアノの上にお忘れなさらぬように」と書かれたカードが入っていた。しかし私は二度と真理に対して恋文はおろかいかなるアプローチも試みなかった。学園祭が終わるとふたりはまた前のように良きライバル同志として一緒に練習した。そして土曜日にはよく一緒に学校付近の食堂へ行って昼食をしたのでだれもがふたりが恋人同士だと思ったようだ。

「江島君、卒業演奏のための作曲は進んでるの？」

「まだまだだめだね。行き詰まってしまってどうしようもなくなったままだ。でも作曲なんて演奏と違って妥協してしまえばできてしまうもんだ」と言って、しかし演奏も妥協がありかとも思う。

「あら、どうして？まだ二ヵ月以上あるんだから妥協なんかしないで傑作を作ってよ。気に入ったら私のレパートリに入れて上げるから」

ウェイトレスが食事を運んで来てテーブルの上に並べる。真理はウェイトレスが立ち去ると、おいしそうな匂いを放つ野菜スープに話題を移した。柚子の香りがオニオンの匂いとうまく調和していて私も味は気に入った。しかしその話にはあまり興味を示さなかった。

「ねえ、江島君、私ね、もしかしたら沢田さんにプロポーズされるんじゃないかって気がするの」突然真理は真っすぐ私の目を見つめて言う。真理が沢田に関して自分に何か相談がありそうだということは予期していたが、この切り出し方に私は驚いた。また胸が締めつけられそうだ。「それで最近ずっときれいになったのか」ととっさに言いかけたが、幸い押しとどめることができた。

「どうして？」

「だって彼ね、自分はピアノが下手だからピアノの上手な人を奥さんにしようと思ってるって言ったり、両親がいろいろお見合いを勧めるけどお見合い結婚なんかしたくはないって言うの。だから・・・」

「ふうん」急に自分の気持ちが沈んでいくのが私にははっきり感じられた。「それでどうするの、もし本当にプロポーズされたら？」

「どうするって・・・」真理は眉間にしわを寄せ、視線を落とした。

沈黙。

私は水の入ったグラスを左手で握りしめグラス越しに拡大された指紋を見つめる。

「もしおれが今プロポーズしたらどうする？」自分でも思いがけない言葉がまるで即興演奏で自然発生する美しいメロディーのように口から滑り出た。

真理ははっとして私の少々ゆがんだほほ笑み顔を見る。その瞬間私は笑い声を上げて言う。「きょうは朝から困らせることばかり言って悪い」このおろかな即興は押しとどめることができなかった。性急な不協和音のような不快感が私を襲う。

「でも・・・はいってお受けするかも知れなくってよ」真理はいたずらっぽく言う。

私は彼女の視線を避けて窓の外を見る。そしてもっと長い沈黙。ふたりはただ食事をする。私はしかし食欲がほとんどなくなってしまっていた。何が私を負の方向に駆り立てているのか・・・それを知るために・・・今の私も助けになれない。

「万が一沢田さんから申し込まれても私は断わる」

私はそれに対しても何も言えない。

沢田にはある悲しい過去があり、それは音楽科の中で一種の伝説のようなものとなり、特に女学生のあいだではさまざまの尾ひれが付加されたため少女漫画のストーリーのような少女趣味的にロマンティックで美しい物語となっていた。そしてロシア人を祖母に持つ沢田はそのような語り伝えに耐え得るだけの美青年であり、さらに彼女等の想像力を刺激するに十分な暗い影もその表情にたたえていた。その女学生たちの付けた尾ひれを取り除いたロマンティックでも美しくもない彼に関する物語とはこうである。

沢田はM大に入って声楽を本格的に始めたが、オペラ歌手をめざしていたため舞台に慣れる目的でM大の劇団フィーニクスに一年生の時入団した。そして一年先輩の農学部の女性と恋に落ちた。彼が初めて出演した劇の中でふたりは脇役ではあったが愛し合う男女を演じ、それが現実になったわけだ。ふたりはやがて同棲するようになる。三年生の時彼は東京であるコンクールに出場し声楽部門で賞を得て、ある財団から奨学金をもらってドイツに一年間留学することになった。彼は恋人を日本に残してドイツに行った。ふたりは手紙をやりとりしたが、すぐに沢田は自分がノイローゼ気味になっており苦しんでいると告白した。原因は慣れない環境、特に言葉の問題であるらしかった。とうとう彼は入院し、一ヵ月で退院したものの完全に回復したわけではなかった。それで予定を早めて彼は帰国することになったが、彼女の方は新しい恋人ができており、彼が帰国をする時までには学生結婚をしてしまい、その後一年間休学し、その間に一児の母となった。沢田はこの女性から帰国後一度会いたいという手紙をもらったが彼女と二度と会おうとしなかった。（女学生のあいだでの語り伝えでは、女性は沢田の子を生んだということとなっている。）

私と真理がM大に入学した時、沢田はちょうどドイツから帰国したばかりで、いつも暗い表情をしていたが、彼が歌うのを聞く時だれもが（その頃はやっていた言い方で言うなら）しびれた。音楽科の女学生のみならず多くの彼を知る女性が彼に憧れの気持ちを抱き、真理もその例外ではなかった。

「沢田さんまたドイツに行くんだって？」私は腕時計をちらっと見る。一時十分。もし沢田と真理が一緒にいるところを見ていなかったら自分は今頃はM高で面接を受けていたかも知れないなと思う。自分の衝動的行動を後悔するわけではないが、初めて沢田に対し申し訳ないことをしてしまったという自責の念が強く湧いてきた。

「そう。まだ一年先のことだけど。こんどは二年くらい勉強してくるつもりだって」

「ふうん、それじゃあ今度こそ帰ってきたら本格的なオペラ歌手か。まあ彼は才能があるから・・・M高の先生で終わってしまうのは確かにもったいないよね」

「あそこは初めから三四年でやめるつもりだったんだって」

「ふうん」

「沢田さん、今朝あなたに会ったあとで言ってたよ。ぼくも三年前江島君くらいの勇気があったら、M高を勧められた時断わって回り道はしないですんだろうにって」

「あれは勇気なんかじゃないよ」私は笑っていすの背にもたれかかった。「実はこのバッグの中には面接のために中本から借りた学制服が入ってるんだよ、ほら」床の上に置いてある白いバッグのチャックを私は少し開けてみせた。

「あら、それじゃあ面接は受けるつもりだったの？」真理はびっくりして私の目をのぞき見る。

「そうなんだ。アパートを出る時には、もうオレは教師になったるでーと覚悟して出たんだ」

「それがまたどうして気が変わったの？」

「発作だよ、発作」私は自分のこの言葉が思わず気にいった。そしてその発作の原因はきょうの君のまつげかな、と言いたくなったが今度は口から滑り出ないうちに抑えた。

「発作って、だって・・・それじゃあ沢田さんに悪いわよ。そんなことで振り回されてるんだから。それも日曜日に」

「うん、ほんとに。君にも悪いことをしてしまった。このとおりだ」私は頭を下げた。

「あら、私には別に謝ることはないわ・・・」

子供連れの若い夫婦が入ってきて真理の後ろのテーブルに座り、メニューを見ながら楽しそうに会話を始めた。五歳くらいの男の子が買ってもらったばかりのぜんまい仕掛けの小さな人形をテーブルの上で歩かせてはしゃいでいる。

私はあとで沢田氏のアパートに訪ねてゆき、きょうの無礼をもう一度謝ろうと心に決め、再び気が重くなる。自分はなんて子供じみたことをしてしまったのだろうと恥ずかしい気持ちが遅ればせながら湧いてきた。沢田は人を叱るということはまずしない人だったが、むしろきょうは彼に思いっきり叱られたほうが気がすむだろうと思った。

レストランを出ると、しばらく繁華街を歩いてバス通りで別れた。真理は別れぎわにハンドバッグから一枚の紙切れを出して私に渡した。それは五線紙を切り取ったもので、五線と五線の間のスペースに次のような走り書きがされてあった。

『江島さんへ

　きょう沢田先輩から結婚を申し込まれました。突然のことだったのでとても驚き、どうしていいのか迷っています。すぐだれかに相談しようと思ったけれど、本当に相談できるのは江島さんだけです。こんなこと相談されてご迷惑でしょうが、どうか高校時代からの友として、あなたの率直なアドバイスを聞かせて下さい。

岡田真理』

　私は読み終えると苦笑した。しかしその苦笑はみるみるうちに泣き顔になり、私の足は真理の去った方へと駈け始めた。声を出して泣きだしたくなるような衝動にかられ、涙が視界をゆがませる。同じ色の服、同じヘアースタイルの女性が皆真理に見えた。しかし彼女を見つけることはもうできない。

第２章へ　　http://p.booklog.jp/book/73003/read

写真(photos):
amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro